

ど家族労働に依存しているような家内工業とが目白押しに並んでいる」、「こういうように歴史的に段階を異にした生産様式が重なり合つて、しかも相互に補強し合っている」状況が「政治的には日本の民主主義的な力の生長を決定的に妨げた」という。「かくして一方では封建的絶対主義の支配、他方では資本の独占化の進展とが決して相背反しないで相互補強の関係にあるということ」、それが日本のファシズム運動における運命をも決定したのである。

以上に明らかなように、日本の前近代性の強調に根ざす現状への危機感、いまだそうした社会構造、そしてそれにつらなる社会意識が変革されていないとの認識と不可分であった。丸山のファシズム研究への関心は一九五〇年代にいたつても持続されており、この論文を『現代政治の思想と行動』（第一部）（一九五六年、未來社）に収録する際にも、これと次に述べる「軍国支配者の精神形態」とおして日本ファシズム研究をスタートして以後、「日本ファシズムの解明は引続いてもつとも大きな研究関心の一つ」であると述べている。しかし、後述するように「長く病床に伏す身となつて（中略）その後見るべき業績を発表していないのは遺憾にたえ」ず「現代政治の思想と行動第一部 追記および補註」一九五六年二月『集』⑥、一〇年近いブランクを埋めるべく丁寧な補注がつけられることとなつた。

*丸山がファシズムを論じた最後の論文は、『人間の研究 四 人間と政治』（一九六一年一〇月、有斐閣）に収録された「現代日本における人間と政治」（『集』⑨）であった。北河賢三氏の「ご教示による」。

**一九五〇年一月から一九五二年四月まで、胸部結核のため療養生活を送つた（↓第五章）。

次いで発表された「軍国支配者の精神形態」（一九四九年五月『集』④）は、神輿（権威）―役人（権力）―無法者（暴力）という政治的人間像の三類型を用いて「無責任の体系」を描き出したことで知られる論文である。そしてそこに貫かれているのは、すでに「超国家主義の論理と心理」でも登場している「抑圧委譲の原理」であり、ここで改めて、「それは日常生活における上位者からの抑圧を下位者に順次委譲して行くことによつて全体の精神的なバランスが保持されているような体系を意味する」と説明される。「抑圧委譲原理の行われている世界ではヒエラルヒーの最下位に位置する民衆の不満はもはや委譲すべき場所がないから必然的に外に向けられる。非民主主義国の民衆が狂熱的な排外主義のとりこになり易いゆえである」とし、排外主義にいたる原因も抑圧委譲の原理をとおして論じられている。

*丸山は、「無責任の体系」という考えは、「超国家主義の論理と心理」にすでに出てはいるのですが、無責任の体系という表現自体は、「軍国支配者の精神形態」の執筆過程でバツと出てきたものなのです。前からずつと考えていたのではない。作品というものはそういうものですけれど、神輿、役人、無法者という三つの類型も、この論文の「むすび」を書くギリギリの段階になって出てきたのです（傍点―引用者）（『回顧談』（下）一四）と語っている。

加えてこの論文では次の二点に注目したい。第一に、論文の前半では軍国支配者の意識形態と行動様式の特徴を明らかにするために、極東国際軍事裁判の供述書や陳述が多用され、そこでは彼らが、ナチ指導者たちと比べてもいかに弱い精神の持ち主であったかが繰り返し述べられていることである。たとえば「一方（ナチ指導者を指す―引用者）は罪の意識に真向から挑戦することによつてそれに

打ち克とうとするのに対して、他方（「我が軍国指導者」を指す——引用者）は自己の行動に絶えず倫理の霧吹きを吹きかけることによってそれを回避しようとする。（中略）ただ間違いないという事は一方はより強い精神であり、他方はより弱い精神だということである」といったように。日本ファシズムの構造を支えてきたその根底に、丸山はそうした「弱い精神」をみる。丸山は、この論文が極東国際軍事裁判の資料にのみ依拠して論じたことへの批判に対して、「もつともである」としつつも「当面の私の問題視角である支配層の精神構造や行動様式を探るためには、この裁判の政治的性格から来る「証拠」の偏向がそれほど障害になるとは思われない」と答えている（「現代政治の思想と行動第一部 追記および補註」一九五六年二月「集」⑥）。「証拠」の偏向」を度外視できるほどに、精神構造を探りたいとの渴望は強かつたのだといえよう。そもそも論文のタイトルも「精神形態」であり、福沢論でもみたように、丸山が求めるのは、「惑溺」を回避しうる強靱な精神であった。

重臣リベラリズムとの決別

もう一つは、この論文のなかで重臣リベラリズムとの決別がなされていることである。「このような政治力の多元性を最後の統合すべき地位に立っている天皇は、疑似立憲制が末期的様相を呈するほど立憲君主の「権限」を固くまもって、終戦の土壇場まで殆ど主体的に「聖断」を下さなかった」。そこには、「絶対君主制とくに頽廢期のそれに共通した運動法則があることを看過してはならない」というのが丸山の最も言いたい点ではあるが、併せて「天皇の弱い性格」に加えて「敗戦よりも革命

を恐れ、階級闘争よりも対外戦争を選んだ側近重臣（中略）の輔弼も与って力がある」と述べている点は注目されてよい。また、「日本の「重臣」其他上層部の「自由主義者」たちは天皇及び彼ら自身に政治的責任が帰するのを恐れて、つとめて天皇の絶対主義的側面を抜きとり、反対に軍部や右翼勢力は天皇の権威を「擁し」て自己の恣意を貫こうとして、盛に神権説をふりまわした。（中略）天皇を禿頭にしたのはほかならぬその忠臣たちであった」と述べて本論を終えている。

後年の回想では、「重臣リベラリズムなるものの限界を身に沁みて感じたというのは、感じのほうだけは実感なのですけれども、どうしてそうなったか、論理的過程とかいうことになる、正直なところ、あまり考えつかないのです」といいながら父の親英米派とのつながりから切り出し、このように述べる。「重臣リベラルの限界を今から根拠づけるならば、羯南なんかと重臣リベラルの西欧志向との対比です。（中略）ヨーロッパにおける、ナチ対イギリスみたいなものです。それが日本に再生産されているというだけで、日本の土壌のなかでというのではないのではないかと思うのです。あの人たちはみんな生まれはいいし育ちはいい。しかし、時局に徹底して批判的であつた清沢、（註）など比べても、「重臣リベラル派はやはり、ヨーロッパ帝国主義に対しては甘いと思うんだな。福沢じゃないけれど、アジアに何をしたか（中略）ということについて、西欧の美化になってしまっているとはくは思うのです」と（「回顧談」（下）二、五〇六）。それは「日本のファシズム運動」で述べられていた日本のインテリゲンチヤの弱さに通じる要素といえよう。

丸山は、この論文執筆と一部重なる時期に、岩波書店の吉野源三郎からもちこまれて、原田熊雄日

評伝 丸山眞男

その思想と生涯

黒川みどり

